授与機関名　順天堂大学

学位記番号　甲第 1878 号

Usefulness of the neutrophil/lymphocyte ratio measured preoperatively as a predictor of peritoneal metastasis in patients with advanced gastric cancer

（進行胃癌患者における腹膜転移予測因子としての術前測定の好中球数/リンパ球数比の有用性の検討）

中山　雄介（なかやま　ゆうすけ）

博士（医学）

論文審査結果の要旨

本論文は、胃癌の腹膜転移を術前に予測しうる因子について検討している．腹膜転移を有する胃癌の予後は不良であるが，術前に正確に腹膜転移を診断するのは容易ではない．非治癒因子の診断目的に行う審査腹腔鏡でさえも 10%ほどで腹膜転移を診断できないことがあるとの報告もある．ゆえに腹膜転移の正確な診断が治療法の選択にとって重要である．近年，好中球数/リンパ球数比（neutrophil/lymphocyte ratio：NLR）や CRP（C-reactive protein：CRP）といった，全身性の炎症を反映するマーカーが胃癌の進行の予測因子になるとの報告が多く認められることから，本論文では NLR や他の臨床検査項目値が，胃癌の腹膜転移を術前に予測することが可能であるかを評価している．

2008 年 6 月から 2011 年 12 月までに手術を行った 359 例の胃癌患者を対象に，腹膜転移の有無と各臨床検査項目値との関連を後方視的に検討した結果，単変量，多変量解析ともに，NLR >2.37 が独立した腹膜転移の予測因子であったとの結果が得られた．この結果から，NLR は胃癌腹膜転移の予測因子となりうる可能性が示され，術前に簡便に測定できる NLR を用いることで，今後の胃癌腹膜転移の診断の一助になる可能性がある．本論文は，NLR と腹膜転移の関連を初めて明らかにした臨床的に意義ある論文である．

よって，本論文は博士（医学）の学位を授与するに値するものと判定した．